

## 国語教師・布川とアクティブ・ラーニングの視点

1982年6月、母校・川崎高校で教育実習をしました。そのとき、出会ったA先生。私の指導担当ではありませんでしたが、教養がオーラとなって後光が射しているような、強烈な存在感のあったA先生と出会いました。A先生に私は、自分の不勉強・無教養を嘆き、A先生と自分との圧倒的な差から、「今から勉強しても間に合わないような気がします」と泣きを入れたところ、A先生は私に、「文学青年の時代は終わったんだよ」と言いました。

私は意味がわかりませんでした、「どういうことですか?」と聞き返しはしませんでした。聞き返したところで、私には理解できない奥深い意味があるように思いました。「その意味は、私が実際に国語教師になって、猛烈に勉強して、自分で見つけるしかない。」そんなふうに思いました。とにかく、その言葉は、不勉強・無教養な私に対する「慰めの言葉」ではなく、何か奥深い意味があるに違いないと思い込んだ私は、その言葉とともに教師人生を歩むこととなります。

猛烈に教員採用試験の勉強をし、大量採用の時代とは言え、奇跡的に合格しました。常々、皆さんに「大学合格に特化した高校生活を送ってはいけません。あらゆる角度から自分を鍛え、なおかつ第一志望にチャレンジしてください。」とお願いしている当の私は、勉強も部活動も満足にせずに、教員採用試験合格に特化して勉強し、やってはいけない方法で、就いてはいけない職業に就いてしまったわけです。

実際に国語教師になって驚きました。1年生の国語の教科書が難しくて難しく、当時は国語Iという科目なんですけど、とにかく難しい。指導書というのがあるって、まあ言ってみれば教師用の教科書ガイドなわけですが、これをとにかく理解するわけです。ところがここで困ったことが起きます。言葉の意味や作品の背景は指導書に書いてあるとおりで結構ですが、本文の解釈というのが納得できない。そもそも、テストで客観的に問うことができるのは読解であって、解釈ではない。そのときA先生のことを思い出しました。A先生は、作品についての授業がひととおり終わると、その作品についてA先生が執筆された評論を配っていました。「指導書はつまらない」と私に言っていたA先生は、指導書どおりの解釈を良しとせず、「これはあくまでも私の考え方だよ。」と断り、ご自分の書いた評論を配っていました。

これを私もやるようになりました。読んで来なかった私は、書くことで鍛えられました。(生田流「アクティブ・ラーニングの視点」においても「書く」ことは重視されます。)

私も評論を書くようになりましたが、ひととおりの授業が終わらねば配れません。では、授業では何をやるかという、「読解」です。平凡で期待外れだったかも知れませんが、皆さんが考えている『読解』は、「読解」と「解釈」の線引きがあいまいではないですか。私の「読解」はその線引きに徹底的にこだわりました。

「読解」とは、「文章に書かれたとおりに事実を読み取る」ことです。従って、答は一つです。そして、その上に、「解釈」の問いを与えました。解釈は自由です。ただ、解釈の中に事実誤認があってははいけません。そこは徹底的に指摘します。その違いがわからない生徒が多く、「解釈は自由だなんて言うておいて、嘘つきだ。」などと言いますが、譲るわけにはいきません。「解釈は自由だよ。でも、事実認定（読解）は自由じゃない。事実誤認はゆるされない。」

さて、この「読み取り」にこだわる読解授業を続けていくうちに、ふとA先生の「文学青年の時代は終わったんだよ」という言葉が思い出されました。「そうか。私の授業は、『文章に書かれたとおりに事実を読み取る』授業、文学性のかけらもない。でも、国語の基本は、『文章に書かれたとおりに事実を読み取る』ことに違いない。これが文学青年は苦手なんだな。これからは、『俺の時代』なんだな。」と、A先生の言葉を「解釈」したわけです。

そして、アクティブ・ラーニングの視点です。「読解」という視点で、「アクティブ・ラーニングの視点」を考えると非常にわかりやすい。

- ① (各教科の)教科書等(文章及び図表等資料)を読解する(教科書等に書かれたとおりに事実を読み取る)。
- ② 読み取った事実を踏まえて、正解のない(不正解はある)問い、正解の複数ある問いを考察し、文章化する。(事実誤認に誤りがあれば不正解となります。)
- ③ その考察をグループワーク等でぶつけ合う。
- ④ グループワーク等で深まった考察を文章化する。

グループワークに積極的に取り組まないタイプの高校生であった私が、こんなにも「アクティブ・ラーニングの視点」に惹かれるのは、「文章に書かれたとおりに事実を読み取る」と「文章を書く」ことにあったのだと思います。アクティブ・ラーニングの視点は、偶然にも、不勉強という私の人生のハンデを克服するための唯一の視点だったような気がします。アクティブ・ラーニングの視点の正しさは、私の人生が証明しています。皆さん、アクティブにラーニングしてください。

【前号で紹介したアクティブ・ラーニングの第一人者、溝上慎一先生。私は、以前、溝上先生の前で、私の人生を「一人アクティブ・ラーニング」と言ったことがあります。▼アクティブ・ラーニングの重要な視点の一つは「協働」です。ですから、「一人アクティブ・ラーニング」というのは「？」なわけですが、要するに「書くアクティブ・ラーニング」「議論するアクティブ・ラーニング」(「議論」と「グループワーク」は違います。)ということで、若い頃の私は(今も若いつもりですが)、これで思考を深めました。◆これが効果的であったことは「私の人生が証明」していると思いましたが、「協働」が重要であることもまた、反面教師的に私の人生が証明しています。皆さん、「協働」してください。】